

スペイン語を母語とする日本語学習者による中止形の意味解釈

—— 翻訳課題における関係の意味の処理を根拠に ——

パブロ エビア ペーナ

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 中止形は非常に頻繁に使われる接続表現であり、日本語教育でも初級から勉強する。しかし、中級以上の学習者であっても習得が不十分な場合がある。日本語から母語への翻訳課題における産出でも不自然な訳文が現れることは珍しくない。本稿はスペイン語を母語とする中級学習者による中止形の解釈を検討対象とし、同じ箇所に見える中止形の「関係の意味」(津留崎 2003a, b)の多様性がどのように、かつ、どの程度、文章理解度と関係しているかを把握することを目的としている。意味の分類については主に日本語記述文法研究会(2008)と、宮崎(2020)を参考にしたが、訳文に反映される解釈の多様性(「曖昧性」)も積極的に含めた。データとしては、和文西訳の学士課程で出された翻訳課題の原文(合計13の文章)と学習者(合計40名)による訳文で見られる解釈を分析した。段落全体の理解度も評価し、中止形の関係の意味の多様性ととの相関関係を検討した。結果の質的データも量的データも関係の意味の多様性と理解度の親密な相互関係を示しているが、従属度など文の統語的特徴との関係性も高いことがわかった。

1. 序 論

スペイン語圏にある和文西訳の学士課程に講師として勤務していた際、翻訳課題を頻繁に出していた。提出された訳文を意味の観点から見ると、特に中止形(テ形・連用形による接続)を使った複文の対応で「ぎこちなさ」がしばしば見られた。例えば、(1)のように中止形を含む節(従属節)が〈前提〉の意味を表していた原文を〈並列〉の表現で訳す例が少なくなかった(日本語での意味は例の下の丸括弧に示される)。

- (1) 昆虫に対するネガティブなイメージは欧米社会で特に顕著であり、人々が昆虫の保全に関心を持たない大きな要因となっている。一方で、日本は…(後略)。

- (1') [主体₁ La percepción negativa de los insectos] [述語₁ es particularmente llamativa en

Occidente] y [主体₂] [述語₂ es un factor relevante que afecta el interés de la población en la conservación de estos animales.] En cambio, en Japón(...).
(「(前略)…欧米社会で特に顕著である。また、人々が昆虫の保全に…(後略)」)

原文の中止形節と主節が「同一主体(または主題)」で結合となっており、主節の内容も「欧米社会」で起きている事態を指すのに対して、訳文ではこれが、等位接続詞 y によって完全になくなっている。主体と、「欧米社会で特に顕著であり」「人々が昆虫の保全に関心を持たない大きな要因となっている」という、中止形節と主節それぞれの関係は保たれているが、中止形節と主節が単純に独立した述語として扱われているため、その間の意味関係もなくなっているのである。

そこで、学習者が上述の中止形の解釈上の難しさを経験している可能性を本研究の出発点とし、

言語の仲介活動とされる翻訳 (Council of Europe, 2001, p. 14) で使われる受容的能力に焦点を置いて、中止形の解釈の難しさがどの程度学習者の理解度と繋がっているか探っていく。

日本語教育の初級で勉強する中止形だが、初級教科書での説明は〈並列〉〈継起〉〈原因・理由〉〈付帯状況〉に限られており (津留崎 2003b, p. 145)、中級以上の教科書では、中止形への積極的な対応がほとんどなくなり、自学習に委ねる傾向がある (宮崎 2020, p. 16)。上級学習者の作文を検討した宮崎による研究 (2020) も、日本語母語話者には見られない不自然な使用例を挙げている (p. 107)。

また、従来の中止形の研究は、言語の産出能力に集中する傾向にある。特に学習向け以外の日本語文章を直接に受容し、それを参照した学習者による作文産出を資料とした中止形の研究は非常に少ない。テ形などの文法的制約を考慮した意味構造を学習者のために明示にする必要を提唱する Hasegawa の見解 (1996, p. 32-34) があるが、これも産出 (話す目的) に限られており、要するに解釈には語用論的な法則で充分だとする立場でもある。しかし、学習者による (1) のような中止形の処理は語用論的法則のみで解決できるか疑問に思える。本稿を、意味処理のためにも意味構造と文法の知識を学ぶことに価値がある可能性を探る機会としたい。

中止形の意味について日本語記述文法研究会 (2008, p. 282-287) の見解を参照すると、中止形としてのテ形・連用形の意味用法が 8 つある (表 1 と (2) を参照)。更に、南 (1974, 1993) などを参考に、接続表現における複数の従属度 (従属節に対格、主体、主題などが入るかによる複数の程度) を認める (詳しくは、表 2 を参照) が、テ形・連用形を従属度の「連続性」の例に挙げて「文脈によって解釈は変わる」としている。本稿では、分析の際、津留崎 (2003a, b) による「関係の意味」という呼び方と概念の部分も援用し、それに近いがより広い日本語記述文法研究会の立場に触れる際は「意味用法」と呼ぶことにする。

また、先行研究は誤用例集・辞典並びに教育

コーパスなどを基にしているが、発展しているもののほとんどが中国語、韓国語を母語とする学習者を対象としたものである。様々な言語を母語とする異なる背景の学習者を対象とする研究を行っていくことはそもそも重要な課題となっているといえる。

そこで本稿は、スペイン語母語話者の日本語学習者が実際にどのようにどの程度、中止形を理解しているかという、理解状況を一般的に把握することを目的とし、スペイン語を母語とする和訳翻訳学士課程所属の日本語中級学習者を対象に、a) 中止形を含む日本語文章を読む際に中止形の関係の意味によって文章の理解度が高くなるのか低くなるのか、b) どの関係の意味で多様性 (曖昧性) が高まるか、c) 曖昧性がどのように理解度に影響を与えるかという質問に答えていく。

以下の内容は次の順番となる。2 節は主に参考となる概念や議論、3 節は研究方法、4 節は結果とその考察、5 節は結論を述べる。

2. 先行研究

ここでは、主に日本語学と日本語教育での研究を参考に、中止形の学習における「解釈の問題」に関する成果をまとめることとしたい。構文的特徴を出発点に、統語論的な特徴と意味上の問題を検討していく。

中止形 (連用形・テ形) の先行研究は、様々な文法的制約などを指摘することによって、構文的特徴を中心に、意味用法 (文例で見られる産出) の観点から中止形の使用例の文法性や容認性を説明してきたといえる。

接続表現を階層構造の観点から体系的かつ包括的にあつかった最初の研究者は南 (1974, pp. 114-131; 1993, pp. 78-103) である。日本語における様々な接続表現を、従属度、即ち、従属節に対格、主体、主題などが入るかによる複数の程度を基準に、三つの類を立てている (表 1 を参照)。テ形の意味用法として従属度が高い順番で「状態副詞的」「継起的」「原因・理由」「並列」の 4 つを認め、三つの類に分けている。連用形も、他形式とは異なり、複数の類に入る。

日本語記述文法研究会 (2008) も、従属節を「従属度が高い従属節」, 「従属度が中程度の従属節」, 「従属度が低い従属節」, 及び「従属度がきわめて低い従属節」の4つの度合いに分けている (pp. 7-11). 「南モデル」と同様に、中止形 (テ形・連用形) の場合で顕著なのは、「～ノニ」「～カラ」など従属度が明白な接続表現と比べると、様々な従属度を持つことである。

しかし、認める意味用法は論者によって異なる。例えば、〈手段〉を〈付帯状況〉の下位項目としたり省略したりする研究の方が多くようである。〈継起〉も、Hasegawaによる廃止 (1996, pp. 181-196) や、市川 (2010, p. 393) が提唱する〈並列〉との併合の対象となっている。本稿では日本語記述文法研究会 (2008, pp. 279-283), および庵ほか (2000, pp. 191-192) を援用し、両方とも単独の意味用法として認める。

本稿では、テ形の補助動詞としての用法及び複合動詞の前項要素となる連用形の用法を除き、日本語記述文法研究会 (2008) による分類を援用し、「テ形・連用形による接続」における「中止法」としての「意味用法」の種類を取り上げる (例も宮崎と同様に日本語記述文法研究会 (2008) から引用する)。同分類の肯定形、否定形ともにまとめて提示し、〈手段〉 (高橋 1979, p. 103; 三上 1963, pp. 88, 91; 庵ほか 2000, pp. 191-193) を (2) の最後に加える。なお、日高 (1995, p. 478) を援用して、否定中止形を使って、先行節で否定した事態を後続節で言い直す「対比構文」を〈並列〉の下位項目とする。

(2)

- a. 日曜日、父は釣りに行き、母は買い物に出かけた。 (並列)
今日は雪が {降らずに/降らないで/降らなくて}, 雨が降った。
- b. 盆地の気候は、冬は寒く、夏は暑い。 (対比)
佐藤さんは英語ができなくて、鈴木さんは中国語ができない。
- c. 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。 (前触れ)
学費の値上げがまた尋常ではなくて、

- 一気にそれまでの2倍になった。
 - d. デパートに行って、靴を買った。 (継起)
手を洗わ {ずに/ないで}, おやつを食べた。
 - e. 風邪をひいて仕事を休んだ。 (原因・理由)
雨が降らなくて、不作になった。
 - f. わかっていて言わないなんて、ひどい。 (逆接)
真実を知らなくて、知っていると言った嘘を言った。
 - g. 参加者は、幹事を入れて8人だ。 (順接条件)
参加者は、幹事を入れていないで8人だ。
 - h. 胸を張って、堂々と行進した。 (付帯状況)
手に何も {持たずに/持たないで}, 避難した。
 - i. 包丁を使って料理をした。 (手段)
包丁を {使わずに/使わないで} 料理をした。 (庵ほか 2000, p. 192)
- (2c) の〈前触れ〉は、「従属節で抽象的・概括的・結論的に述べた内容を、主節で具体的・詳細に述べ直すという関係」(日本語記述文法研究会 2008, p. 282) を言う。先行する節と後続する節の主体が同一か異種かを基準に関係の意味を分類した津留崎 (2003a, b) は、主体の同異を問わない〈前提〉と、同一主体しかない〈注釈〉〈解説〉〈評価〉のように細分化している。本稿では宮崎 (2020) を援用し同一の種類として扱うが、「冷房という技術はあまりにも素晴らしく、私たちは暑い夏に冷房のおかげでいろいろ助けられている」(田代ほか 2014, p. 28) のように、意味的に〈評価〉として解釈できる異主体の場合も挙げられるため、ある程度〈前提〉との連続性が見られるといえる。最後に、Hasegawa (1996) で提示された SETTING (「場面設定」) (pp. 208-209) も、〈前触れ〉として解釈しやすい例文が多いが、(3) のように主体の同異などで解説しにくい文として〈場面設定〉という範疇を立てる (分析や結果では〈時〉として示す)。

表1 関係の意味と従属度

関係の意味	従属度	中に現れる要素の例	意味的に置き換える表現の例 (同従属度)
並列	低い	ヲ格など, ガ格 (主体), ハ (主題)	句点
対比			～ガ・ケレドモ
前触れ (前提, 注釈など)			句点
継起 (先行事態)			～アト
原因・理由	中程度	ヲ格など, ガ格 (主体)	～ノデ, ～カラ
逆説			～ノニ, ～テモ
順接条件			～ト
付帯状況 (副状態)			～ナガラ
手段	高い	ヲ格など	～ヲモッテ

(3) 明治になって流行し始めた。

上述の(2)の意味の分類を南(1974, 1993)と日本語記述文法研究会(2008)の従属度に当てはめると表1のようになる(津留崎の関係の意味の種類名は括弧内で示す)。

最後に、白川(1990)が検討した「独立文」もあるが、文法的に主題のみならずモダリティを取れるなど文法的特徴はあるものの(日本語記述文法研究会の分類に従えば「従属度が非常に低い接続表現」に入るだろうが)、例文の多くが〈前触れ(前提)〉や〈並列〉として解釈できる。

以上に述べた意味用法、関係の意味に関する研究者の様々な見解の相違点も、「曖昧性」の問題を反映している可能性がある。本稿では曖昧性を「一定の熟達度を持つ観察者たちが解釈した意味の多様性」とみなす。

本稿ではスペイン語圏の学習者の状況を考慮し中止形への理解の把握をすることを目的としているが、その過程で学習者に向けた新たな分類やそのための考察などが課題となる可能性もある。

3. 研究方法

本稿は、実験を行わず実際の授業に出た課題のデータを活用して分析の対象としている。データは一つの学期で行う科目の翻訳課題に当たる。なお、当科目も分析した文章も中止形の学習を目的にしたものではない。

分析対象となる和文西訳を提出した学生は全員で40名であり、翻訳過程で履修している科目によって2つのグループに分けられている。第1グ

ループは日本語中級者(ほぼCEFRのB1前半相当の能力)18名(学士課程4年翻訳科目の履修者全員)から成り、おおよそ日本語能力試験のN3レベルに相当する能力を有する。課題として『新完全マスター読解日本語能力試験N3』を中心に中級者向けの読解教科書からとった7つの文章を翻訳させた。文章は記述文や説明文、および物語文であり、テーマは「日本茶」、「エアコン」、「漢字」、「夜中に鳴った時計の話」、「大学生のバイト」、「初めてスキーをした日を語る」であった。第2グループも日本語中級者(ほぼCEFRのB1後半相当の能力)22名(学士課程5年翻訳科目の履修者全員)から成る。翻訳課題の内容は、インターネットで公開されている6つの文章である。テーマは「食品ロス」、「飢餓」、「寄木細工」、「樹海」、「勝尾寺」、「グローバル化」であった。

訳文で見られる原文の理解度の分析については、上述の文章の訳文を資料に、翻訳の能力を「原文の処理(理解)」、「転移(翻訳の手続きによる)」、「訳文の処理」に分けているHatim & Mason(1997)による分類(p.171)を参考にし、「原文の処理」を中心に日本語文章(原文)への理解度を5段階の尺度で評価した。また、意味用法(関係の意味)を分析する際、各文章の原文と訳文を並べて、文と文を結びつける文脈にも対応する必要がある。文以上の現象を考慮した分析ができるように段落レベルで並べた。また、「不対応」、すなわち翻訳しなかった場合もあった。これを、ある箇所の翻訳をあきらめてしまう学習者の理解度が未熟な状態にあるとする場合もあった。しかし、十分わかっているが「冗長回避」の対策として訳

出していないとみなした場合は別に数えた。

最後に、「曖昧性」に対応できるように、例えば「継起」か「手段」かの判断が難しい場合、〈継起・手段〉のように同じ中止形に二つ以上の関係の意味を含むタグを付与する。そのように関係の意味の「曖昧性」を「意味の広さ」として捉えていく。「曖昧性」を「中止形を含む一定の複文について、観察者が分析する際に見いだした中止形の関係の意味の多様性」とし、それを平均絶対偏差（非正規分布のサンプルに適切とされる偏差値）で示す。偏差値が高いほど関係の意味のタグの多様性（「曖昧性」）が低い程度を示す。

4. 結果と考察

ここでは、原文と訳文に出現している中止形の関係の意味を比べて分析した結果をまとめて議論をする。1グループ、2グループの順番で原文の特徴を述べてから訳文で見られる現象を述べていく。

4.1 原文の特徴

1グループの原文には合計67文があり、中止形の出現件数は合計35件だった（これに学習者18名を乗じると、合計630件となる）。7つの文章の中に中止形が現れる頻度を意味別で述べる。

出現件数の合計から述べていくと（表2）、〈並列〉を含む件数が7つの文章で4件（11.4%）で、

〈付帯状況〉が2件（5.6%）と〈手段〉が3件（8.6%）あって比較的少なく、〈継起〉（37.1%を占める13件）と〈原因・理由〉（30.6%を占める11件）の方が多かった。研究者による分析では最多の〈継起〉の出現件の半分以上が「ダブルタグ」（「継起・付帯状況」など）で最も曖昧性が高かった。2節でも述べたように、Hasegawa（1996）による継起の廃止や、市川（2010）が〈並列〉のタグと混合するなど、おそらく先行研究で最も議論的になる項目の一つと考えられるが、ここでは〈並列〉との併存ではなく、〈手段〉や〈原因〉とする解釈と競合していること（「〈継起・付帯状況〉」）が著しい。

(4) 母は父がこの時計を大切に使っていたことを思い出し（継起・原因）、「この時計はまだ働くんだって伝えたかったのかもしれない」と言って（継起）笑いました。それからは、またこの時計を動かして（継起・手段）使っています。父も喜んでいるかもしれません。（『時計』）

まさに、(4)の段落で三つも〈継起〉として解釈できる場合ではあるが、一つ目の文を、単なる継起する三つの事態として解釈すると、思い出す事態の最初の従属節が、主に笑う事態の主節を修飾しているのを忘れる可能性もある。また、この文で起こる事態の時間的先後関係自体にも連続性があるため、〈手段〉や〈原因・理由〉に近い意味とする解釈の可能性もあり、解釈者がその点を

表2 1グループの関係の意味の頻度

タイプ	記述手順	過程記述	記述	物語	過程記述	記述	雑談	合計
意味/テーマ	日本茶	エアコンⅠ	漢字	時計	エアコンⅡ	バイト	スキー	
並列	0	0	1	0	0	1	0	2
代替	1	0	0	0	0	0	0	1
並列/継起	0	0	1	1	0	0	0	2
前触れ	0	0	0	2	1	0	0	3
継起	4	0	0	1	0	0	1	6
継起/原因	0	0	0	1	0	0	0	1
継起/付帯	0	0	0	2	0	0	1	3
継起/手段	1	0	0	0	0	0	0	1
原因	0	4	1	0	1	1	4	11
付帯	1	0	0	0	0	1	0	2
手段	3	0	0	0	0	0	0	3
合計	10	4	3	7	2	3	6	35

表3 2グループの関係の意味の頻度

意味/テーマ	食品ロス	飢餓	寄木	樹海	勝尾寺	グローバル化	合計
並列	3	0	1	1	6	1	12
前触れ	0	0	2	1	1	3	7
継起	0	0	2	0	3	3	8
継起/付帯	3	0	0	0	0	0	3
原因	2	4	2	2	0	2	12
付帯	2	0	0	0	1	1	4
手段	2	0	4	0	0	0	6
時	0	0	0	1	0	0	1
合計	12	4	11	5	11	10	53

無視すると限られた理解になるかもしれない。特に「思い出す」という箇所に対して15名(88.2%)が〈継起〉の意味で訳出したが、研究者の解釈の範囲に入っているとはいうものの、段落全体の理解度は中程度～高度であり、特に容易であったとはいえない。ある程度、関係の意味のみでは説明しにくいだろう。

2グループが訳した6つの原文には合計133文があり、中止形の出現件数は53件だった(対象者が22名のため、分析の対象項目は合計1166件数である)。教科書も資料に含めた1グループと比べると文章がより長かったが、ジャンルは6つとも記述文である(そのため表3には「タイプ」の行を含まない)。課題の量とともに中止形もより多く現れる。

意味用法の比率は(表3)、〈前触れ〉の頻度もより高かった(合計の13%)。理由は、文の増量に加えて、教科書の文章は含まれておらず、全てインターネットから取ったためと思われる。最も多かったのは、〈並列〉と〈原因・理由〉(各12件で22.6%)であり、次に〈前触れ〉が7件(13%)、〈付帯状況〉が7件(13%)、〈手段〉が6件(11.3%)あった。ただし、〈付帯状況〉の3件が〈継起〉との併合にある。

4.2 総理解度と曖昧性の関係

3節で述べたように、曖昧性を一定の複文に現れる中止形に付与する関係の意味のタグの多様性のこととし、それを平均絶対偏差として表示する。また、段落全体の「理解度」との相関関係を述べる。理解度の点数と並べる曖昧性を示す平均絶対

偏差値は表4、5で示される。

表1、2のデータを並べた相関係数は1グループでは $r=0.97$ (自由度=2, p 値=0.000405)、2グループでは非常に高い $r=0.83$ (自由度=2, p 値=0.04156)であり、両方のグループでも非常に高かった。総合的に、中止形の「理解度」を観察する際に「関係の意味の多様性」として定義した「曖昧性」への考慮が重要であり、同じく「曖昧性」を観察する際にも「理解度」が大切な変数となる可能性が高いことを示す。ただし、意味自体というものは無論、数値などで測るものでもなく、また、本稿の様々な意味はスケールを形成し

表4 1グループの曖昧性と理解度の (a) 平均数値と (b) その間の相関関係

(a)			(b)	
文章名	曖昧性	理解度		相関係数
日本茶	1.02	2.24	r	0.97
エアコンⅠ	1.09	2.94	自由度	2
漢字	1.06	2.76	P-value	0.000405
時計	1.03	2.50		
エアコンⅡ	1.06	2.78		
バイト	1.08	2.83		
スキー	1.00	2.27		

表5 2グループの曖昧性と理解度の (a) 平均数値と (b) その間の相関関係

(a)			(b)	
文章名	曖昧性	理解度		相関係数
食品ロス	1.26	2.88	r	0.83
飢餓	1.35	2.97	自由度	2
寄木	1.24	2.72	P-value	0.04156
樹海	1.29	3.00		
勝尾寺	1.32	2.96		
グローバル化	1.27	2.90		

ているのでもないが、偏差値は原文の関係の意味の中止形に対する複数の参加者による様々な訳文の関係の意味の分布を示す。

4.3 主な関係の意味への理解度

4.1 で述べたように、1 グループの原文で最も多く見られたのが〈原因〉〈継起〉〈付帯状況〉であり、最も曖昧性が見られたのは〈継起〉である。一方、3 回しか出ていない〈前触れ〉が、本稿で「曖昧性」と呼ぶ様々な関係の意味で解釈される傾向にあった(18 名のうち 5 名のみが同じ〈前触れ〉の意味で解釈した)。これは、津留崎(2003b)、宮崎(2020)で述べられる日本語の教科書や指導に出る頻度が低いことを反映している可能性がある。この学習段階では日本語の〈前触れ〉の認識は未熟だと考えられる。

1 グループとは異なり、2 グループは〈並列〉〈継起〉〈原因〉の場合はほとんど曖昧性が見られず、理解度も高かった。しかし、〈前触れ〉が「前提」以外の場合(「注釈」、「評価」など)は解釈の乱れが見られた。これはスペイン語では「前触れ」と、後続節の事態について概括的な情報を事前に述べるのがなく、自然に主節が先行することが多いので、単に後続する節を連帯修飾で表現することもあった。なお、「前提」の場合も多くの学習者が〈原因〉として解釈する傾向にあった。正しく訳出した学習者は〈前触れ〉のことを意識しているとは限らない。

4.4 階層構造との関係性

両方のグループで、最も総合的な理解度が低かったのは、2 グループの(5)のように階層構造が複雑で、中止形が連続する場合である。以下で比べる意味的に異なる複数の訳文は統語的にも異なる階層構造がある(名詞句内の構造は簡素化した形で示す)。

(5) [経済のグローバル化とは、[[[資本や労働力が [[国境を越えて (付帯状況)] [活発に] 移動し (原因)]], [[貿易や海外への投資が 増大する]]] ことによって (手段)]], [[世界における経済的な結び付きが 深まる]]] ことを指しま

す。]] (「グローバル化」)

(5') [[La globalización económica] [se refiere a [[la profundización de los vínculos económicos en el mundo [(手段) a través del [aumento del comercio], [la inversión en el extranjero] (並列), [movimiento activo de capital] y [mano de obra hacia el exterior]]], [(付帯状況) superando las fronteras]]]. (S08) (理解度 2.5 点)

(5'') [[La globalización económica] [[se refiere a [la profundización de los vínculos económicos en el mundo [(手段) [mediante [el movimiento activo del capital] y [la mano de obra (付帯状況) dentro del país]] (並列) ? [(手段) mediante el aumento del comercio y la inversión extranjera]]]]. (S20) (理解度 1.5 点)

理解度が高かったこの文章(『グローバル化』)の中で最も理解度が低かった段落であり、ほとんどの訳文では、元の〈原因〉の意味がなくなり、〈並列〉となっている。一方、統語的に階層構造が簡素化すると中止形の理解度が上がる傾向もあった。

(6) (前略) 近年は、情報技術 (IT) の革命的な進展により、インターネットを通じた情報伝達が飛躍的に発展し、物流や資金移動の加速化につながっています。戦後世界を二分していた米ソ冷戦時代は、1990 年の東西ドイツの統一、1991 年のソビエト連邦の崩壊によって終わりを遂げ、旧ソ連・東欧陣営が一斉に西側の市場経済体制へ移行しました。

(7) 1980 年代までは、先進国が途上国から原材料を調達し、工業製品を途上国へ輸出する取引形態が主流でしたが、1990 年代以降、生産コストを大幅に引き下げるため、先進国間における生産分業も活発に進みました (攻略)。

(6) も (7) も (5) に続く段落から取ったものであり、統語的に階層構造が様々であるが、両方も理解度が高かった文の例である。しかし、

(6) (7) のように中止形を使った文のほとんどは中止形だけでなくそれ以外の接続表現（例の点線部）やある程度文法化した表現（破線部）と共に用いる中止形か、中止形以外の接続表現のみを含むものだった。

5. 結 論

以上、意味用法・関係の意味を根拠に、スペイン語を母語とする日本語の中級学習者による中止形を使った文章の理解状況を明らかにすることを試みてきた。

対象の中級学習者は、読解を前提とする翻訳課題において日本語の文章を扱うとき、語彙の意味のあるとされる品詞に属する単語と同様に、「機能語」の接続詞や接続助詞などを「語彙素的な扱い」、すなわち一字一句の直訳を行う傾向が見られる。一方その中で、辞書などで比較的検索しにくい中止法の場合は、様々な対応や工夫が見られたが、下位群ではテ形を接続詞、連用形を読点に訳すなどの語彙的な扱いが多かった。その中で、スペイン語としても不自然と見なされる場合も少なくなかった。訳文が不自然であるからといって原文の内容の理解が不十分だとは限らないが、少なくとも語彙的な扱いなどを反映している可能性が高いと思われる。

以上の結果は、学習者が〈継起〉〈原因・理由〉など事前に指導された意味用法に頼っていることと、指導されていない〈前触れ〉などの解釈が乱れる傾向を明らかにしているが、特に難しい意味用法ではなくても、2つ以上の中止形節が並んだ場合、理解度が下がる傾向も示している。このように統語・意味による解釈は、テ形などを「書く」という「産出活動」のみならず「読む」という「受容的活動」においても中止形の様々な関係の意味に関する文法知識の重要性を示唆している。なお、関係の意味で訳文を比較していても、例えば、同原文の同箇所について二つ以上の訳文で〈並列〉が見られる場合は、それぞれ違った階層に現れた「意味の異なる〈並列〉」の場合となる可能性もある。関係の意味などは重要な知識ではあるが、そのみに頼った学習は不十分であろう。

そのため、統語と意味を一緒に扱う構文の考え方が「テ形・連用形」の学習で重要な助けになるといえる。

また、中止形の指導については、中級以上の教科書では〈並列〉〈継起〉〈原因・理由〉〈付帯状況〉以外の関係の意味の導入は比較的珍しいが、自律学習を前提とする読解訓練などの教科書には〈前触れ〉などの例も掲載されることがある、と本研究の過程で確認できた。本研究のデータからすれば、例えば〈前提〉〈注釈〉などを含む例を説明なしに課題に出すと、その関係の意味の意識が未熟な状況にいる学習者による意味解釈が乱れる可能性が高いので、関係の意味を意識させる指導とともに、初級などで導入した項目の復習などが勧められる。

中止形の意味の範囲が非常に広く、解釈が難しいときはある程度の曖昧性を認めることにより、従来の研究では現れない「継起・付帯状況」などの「ダブルタグ」を採用することが有用であると確認できた。今後も翻訳の観点に立って新たな問題点を指摘するツールとして活用したい。

以上の結果は中級の学習段階で予想される熟達度や状況、文章を扱う際に見られる傾向を検証することによって、学習者による中止形に関する理解の把握を一步進めたと言えるのではないかと、今後の主な課題としてとりわけ「曖昧性の高い」中止形の処理で見られた「語彙的な扱い」から「構文としての意識」へと進めるような環境を想定し、中級以降に導入される意味用法を含め母語のスペイン語の表現と比べ、翻訳などの仲介活動を活用できる、日本語教育を出発点とした効率的なカリキュラム改善を図っていきたい。また、研究の改善のためにも、中止形の解釈の効率性を促進することを目的に、翻訳課題における解釈による意味の変化のメカニズムをより細かく説明できるように中止形の意味に関する研究を続けたい。

引用文献

- 庵功男・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
市川保子 (2010) 『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク

- 白川博之 (1990) 「独立性の高いテ形・連用形について」『広島大学教育学紀要』第2部第38号, pp. 235-244
- 高橋太郎 (1979) 「文の途中での切り方」岩淵悦太郎編著『第三版 悪文』日本評論社 (第三版)『悪文』pp. 95-115
- 田代ひとみ, 宮田聖子, 荒巻朋子 (2014) 『新完全マスター読解——日本語能力試 N3』スリーエーネットワーク
- 津留崎由紀子 (2003a) 「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係」『日本語科学』13巻 pp. 7-32
- 津留崎由紀子 (2003b) 「日本語教育における中止形の指導と日本語研究」『日本語教育における中止形の指導と日本語研究』
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法 6-11 部 (復文)』くろしお出版
- 日高水穂 (1995) 「ナイデとナクテとズニ——テ形の用法をもつ動詞の否定形式——」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版, pp. 471-480
- 三上章 (1963) 『日本語の構文』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語文法の構造』大修館
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館
- 宮崎聡子 (2020) 『日本語学習者による中止形接続の研究——作文コーパスの調査を通じて——』博士学位論文. 岡山大学大学院社会文化科学研究科.
- 森秀明 (2017) 「一般的な日本語テキストにおける助詞比率の規則性」『言語資源活用ワークショップ 発表論文集』
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press. Retrieved from <https://rm.coe.int/1680459f97/>.
- Hasegawa, Y. (1996). *A Study of Japanese Clause Linkage - The Connective TE in Japanese*. CSLI Publications.
- Hatim, B. & Mason I. (1997). *The translator as a communicator*. Routledge.
- Kuno, S. (1973). *The Structure of the Japanese Language*. MIT Press.

Interpretations of Japanese *-te* and *ren'yō* connectives by Spanish-speaking intermediate students: Relational meanings as evidenced in translation tasks

Pablo HEVIA PENNA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Japanese *-te* and *ren'yō* connectives are very frequent in both conversational and written language, and a part of every curriculum of Japanese as a foreign language. However, evidence shows that intermediate and advanced students display some difficulty using these constructions to produce natural sentences, which is also evidenced in translation tasks. The purpose of this study is to investigate how and to what extent the diversity of *relational meanings* (Tsurusaki, 2003a, b) proposed by Spanish-speaking intermediate students in their translations is related to their level of comprehension of the original texts, which contain several cases of connectives. A classification for the meanings which draws mainly from the proposals by the Japanese Descriptive Grammar Research Association (*Nihongo kijutsu bumpō kenkyūkai*; 2008) and Miyazaki (2020) was used to accommodate the range of the meanings (or experienced “ambiguity”) found. Thirteen texts and their translations by forty students were analyzed for their interpretations. The comprehension reflected on each version was also graded paragraph by paragraph. Both qualitative and quantitative data suggest a strong link between meaning diversity of connectives and general comprehension of the texts in intermediate students, although syntactic complexity should not be dismissed as a key factor in the analysis.